

【曙】あけぼの

・春はあけぼの やうやうしろくなりゆく山際 すこし明かりて むらさきだちたる雲の細くたなびきたる
清少納言『枕草子』より

古語で明け方を意味する言葉は「曙」をはじめ多くあります。言葉により多少の意味、ニュアンスの違いがあるので、列挙して意味を検討してみましょう。銘として使う場合、役に立つかもしれません。

- ①<暁(あかつき)> 古くは「あかとき」。夜の終わる頃。夜から朝に至る最初の時間。
- ②<東雲(しののめ)> 日の出前の薄暗い時刻。
- ③<曙> 明けほのかという意味。空が明るくなった頃。
- ④<朝朗(あさぼらけ)> 曙より明るく既に夜が明けたといえる時刻。異説 秋冬の曙
- ⑤<あした> 暗い時刻の終了。「ゆふべ」の対。
- ⑥<有明> 夜が明けてもなお月の残る朝。
- ⑦<あさ> 日の出から正午まで。

以下、話題を広げず「暁」と「曙」に絞って話を進めましょう。

古語辞典や歌語の解説などの中には「暁」や「曙」に具体的な時刻を表記しているものがあります。それらはほとんど「暁」が「曙」より先行する時刻になっています。

しかし、四季により夜明けの時刻が異なる以上、夜明けを表す言葉を一定時刻に限定することはできないのではないのでしょうか。

しかも、用例を見ると必ずしも時刻を表わすだけではないことに気がつきます。

- ・暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや 『後撰集』紀貫之
〔暁さえなければ白露のようにおきて悲しい別れをすることはないのに〕

通い婚の時代、この歌のように一夜を共にした男女の別れの時刻を暁というのは歌語として常のことです。暁は夜の終わりとしての朝を意味しているのです。

それに対し、曙は一日の始まりとしての朝を意味します。つまり、必ずしも時刻の問題ではなく、どの時点から夜明けを捉えるかにより使い分けているのです。

「暁の茶事」を「曙の茶事」と称さないのは、この茶事が夜から継続する茶事であり、夜が尽きるのが初座の終わり頃であることから理解できます。

裏千家十一代家元玄々斎の好み物に曙棗があります。朱漆香次形薄茶器で甲に鶴、胴に亀と松の黒絵があります。流派では人気が高く多くの写しが出まわっています。

この棗は玄々斎が長男一如斎玄室の点茶始披露に際し好んだものです。

この一如斎は大変優秀で玄々斎自慢の息子だったようです。しかし残念ながら家を継ぐことなく、十七歳で病死してしまいました。

私は一如斎の書、画賛を三幅拝見しましたが、いずれも子供とは思えない筆勢と品があり驚かされました。

東大寺のお水取りが終われば、いよいよ春ですね。ホカホカの「春はあけぼの」が待ち遠しいです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~